

笑顔のすてきな人

坂本 しのぶ¹⁾

原田先生との出会い

原田先生と初めて会ったのは、私が5、6歳の頃だったと思う。50年ぐらい前の、まだ小さかった頃のこと。先生と初めて会ったのは、市立病院（現総合医療センター）が最初で、胎児性患者を集めて診よんなはったもんね。そのとき診察されたことは覚えとらんけど、先生が、私ば抱っこさしたの覚えとる。後から、あの時、抱っこさした先生が原田先生って知ったけど。このときは胎児性患者が集められていたけど、先生はそれではいけないと



2008年3月、福田農場にて（水俣学研究センター所蔵）

思っ、あとではいろんな家を見て回りよらした。その頃のことは、お母さんがよく知っている。私が覚えとるのは、先生がいつ来るって連絡入れらしたら、近くの何軒かの人たちが私の家とかに集まったらしたもんね。集まった人たちは、原田先生に診察してもらうために来よらした。

先生は、最初から普通のおじちゃんという感じだった。よく先生の腕に子どもたちがぶら下がって戯れていた。話しやすい雰囲気があって、何でも話していた。病院では、あんまりしゃべれなかったけど、家に先生が来らすようになって話ができるようになったと思う。家にはいろんな人をいっぱい連れて来ていた。熊大の先生たちだったのかも。茂道を回って、湯堂の家に来ていた。茂道から湯堂までは、今みたいな道はなかったから、山道ば歩いて来よらしたってお母さんが言いよらした。先生が家に来始めらした頃は、水俣病がハッキリしなかったし、漁師さんも何ば調べに医者どんが来らすとだろかって頃だったって、お母さんが言ってたから、先生は大変だったと思う。でも先生は、きつかったろうけど、いつも笑ったらしたもんね。

何かあった時は、原田先生に相談していた。足とか頭が痛いときとか、原田先生にいちばん話ばしよった。何でも聞いてくれた。病院はあっちに行つた方がいいよとか、ほかの病院や先生を紹介してくれた。体のことはもちろん、何でも話を聞いてくれて、相談すればほっ

としよった。原田先生は何でも真剣に聞いてくれよったもん。(加賀田)清子さんも頭のことを相談しよった。水俣には、あんな先生はおらんもんね。一般の先生とは違うもんね。いばっておられんやった。全然緊張せんでもよかったし、私は友達として話げできた。家では時々お父さんと焼酎飲みよらった。原田先生は飲むのが好きよったもんね。

ストックホルムでの経験

私が15歳のとき、ストックホルムに行く話はお母さんから聞いた。日吉(フミコ・水俣病市民会議会長)先生たちが決めたみたい。私たちが行くように言われた。お母さんからは「行くよ」という感じだった。それまでは、小学校の修学旅行で熊本や阿蘇に行ったぐらいだったからストックホルムに行くのはこわかった。ストックホルムに行く前に、原田先生が来た。あっちに行ってからのことや体のことを相談した。飛行機が心配だった。それと、



1972年ストックホルムにて。左より原田、宇井純、坂本フジエ、しのぶ、濱元二徳(塩田武史氏撮影)。

食事のことがとても心配だった。自分たちに合うのがあるかなと思って、それで家から梅干しを持って行った。他にもいろいろな物を持って行った。原田先生は、濱元さんや自分たちがいるから大丈夫、心配せんでいいと言ってくれた。水俣から一緒に行ったのは、原田先生、濱元さん、塩田さんだったと思う。水俣からは車で東京まで行って飛行機に乗ったと思う。飛行機に乗るのは生まれてはじめてだったから飛行機がこわかった。酔ったりはしなかったし、機内食も美味しかったもんね。一晚飛行機の中で過ごした。9時間くらい乗とったかな。あまり眠れなかった。飛行機の乗り換えをモスクワだったかな、でして一泊してストックホルムには行ったもんね。

行く前に、お母さんから洋服を買ってもらった。大阪のおばちゃんが、私のために買って送ってくれた青いスカートも持って行ったけど、そのスカートを途中で泊まったモスクワのホテルに忘れた時は、お母さんとケンカしたもんね。大阪のおばちゃんは、お母さんの妹。

他の人たちはホテルで、お母さんと私は一般の家に泊まった。その家の旦那さんが日本人だった。1週間ぐらいいて、見物なんかもできた。その家に小さな女の子がいて、私になついて離れんかった。それで別れるときに泣いた。私も泣いた。

国連人間環境会議には2、3回行ったと思う（国連主催の本会議、NGO主催の会議など）。それから、私たちは日吉先生たちが市民会議で訴えよるビラとか相思社のカンパのビラを配った。そんなことをするのは初めてで、最初はいやだった。恥ずかしかったし、ビラを渡す時に何と言っていいかわからなかったから。でも、後ではだんだん慣れてきた。アイリーンはそのときのビラを持っているかもしれないⁱⁱ⁾。

行く前から、どんなことをするかは聞かされていた。お母さんが立つて話をするときには隣に座っていた。私は名前を言っただけ。多くの人前で話すのは初めてだったので、とても緊張した。お母さんは堂々としていた。「この子を見てください。この子は軽い方です。水俣にはまだ重い人がいます。」ってお母さんが言ったのを今でも覚えるもんね。お母さんが人前で話すのを見たのは、はじめてだった。強くなって思った。姉も私も水俣病で、お母さんと同じ立場だったら同じように強くはなれないって。聞いている人たちは、みんな一生懸命に聞いてくれたし、泣いている人もいた。

行く前は行きたくなかったけど、いろんな人と知り合いになれてよかったなあと思った。いろんな人と出会えて楽しかった。ストックホルムでは、みんなが真剣になってお母さんの話を聞いてくれた。それで、それまでは水俣病のことをあまり言いたくなかったけれど、水俣病のことを恥ずかしいとは思わなくなった。お母さんや自分が水俣病であることが恥ずかしいことではないと思うようになった。私は別に差別されたことはないし、学校とか近所の人からも何にも言われたことはなか。でも、水俣病のことは言えん雰囲気だったもんね。それまでは、支援者の人とか患者同士の内輪でしか水俣病のことは話とらんかった。ストックホルムに行く前と行ってからじゃ、自分の中でそこが一番変わったと思う。あん時は、自分が水俣病が終わってないって訴えていくとは思ってなかったけど、お母さんが人前で堂々と話すこととか、ストックホルムの人が生懸命聞いてくれたことが、今につながってる。



水俣アピール（水俣病センター相思社所蔵）

医者への思い

急に具合が悪くなったときに水俣の医療センターに行っても、水俣病のことをあまり知らない先生がいて、そんなときは原田先生に電話して、原田先生から医療センターの先生に話をしてもらったこともある。そういうことが何回もあった。

石川さゆりショーⁱⁱⁱ⁾をするときにも、原田先生が相談に乗ってくれて石原さんに言ってくれたから実現したんだもんね。あの時私たちは20歳すぎとったから、自分たちだけで何かでっかいことをしたいって思っとった。だから、なるべく自分たちだけで、ポスターを貼ったりチケット売ったりもした。船に乗って天草に行ってチラシも配った。舞台にみんなで立って滝下くんが挨拶をした時は泣いた。自分たちだけじゃできんと思っていたけど、何でも頑張ればできるって。そんな私たちを先生は見守ってくれとった。

これから先どうしていけばいいかも相談してた。だんだん足もかなわなくなるし。ほたるの家^{iv)}で2年前ぐらいにそんな話をした。先生は、自分で歩かないとなると、だんだんこのまま歩けなくなるよと言ってた。だから、病院でのリハビリも頑張ってるし、車椅子も使わないで自分で歩くようにしてる。

いつも思うけど、原田先生がいたらなんとかなる。もしも何かあった時には、例えば、おなか痛くなったりした時に、どんな風にすればいいか電話して聞きよった。もっと原田先生みたいな人が出てくればいいなあ。いつも思うけど、花田先生がお医者さんだったらいいのになあと思う。あたしたちのことを知ってるし、何でも知っているもんね。私は花田先生を頼りにしている。

お医者さんには、もっと水俣病のことを勉強してほしい。水俣病にもいろんな症状の人がいるもんね。もっと真剣に、一人一人を見みてほしい。一人ひとりをみるって簡単じゃなか。権力は持たん私たちを真剣にみてるお医者さんが欲しい。国とか県とかチッソの方につくお医者さんじゃ、つまらんもんね。原田先生だけが真剣に向きあってくれた。そんな先生には、いつか天国で会いましょうねって言いたい。まだすぐには無理だけど、いつかは会えるって思ってる。

注

- i) この文章は、水俣芦北公害研究サークルで坂本しのぶさんと交流の深かった田中睦（熊本学園大学水俣学研究センター）が2012年10月から数回にわたり遠見の家で聞き取りを行い文章に起こしたものである。最終的な文章の修正は、ほたるの家の谷由布さんがご本人に確認し行った。タイトルもご本人がつけられた。
- ii) ストックホルムでデモ行進しながら配布したビラは、1972年6月に第1回国連人間環境会議において「水俣アピール」として読み上げられたもの。水俣アピールは、水俣病センターの設立が呼びかけられていた。1969年に水俣病第一次訴訟を提訴し、この頃、地域の中で孤立する訴訟派・自主交渉派の患者たちが地域のなかでいかに生きるかを考え、水俣病センター相思社の設立を希望しカン

パ要請をストックホルムで初めて行った。現在、水俣アピールは水俣病センター相思社に保存されている。

iii) 石川さゆりショーは、1978年9月22日に水俣市公民館において開催された。

iv) ほたるの家は、1996年に水俣病患者や支援者らが集まる場所としてつくられた。水俣病が終わっていないことを訴えていく場でもある。

より多くの人が集まれるよう、2012年4月からは「遠見の家」も開設し、水俣病患者をはじめ、さまざまな人が交流する場であるとともに、生活支援を行っている。